



## 山根徳太郎北京留学往復書簡研究プロジェクトの発足

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, ひとみ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00017946">https://doi.org/10.24729/00017946</a>

## 《研究ノート》

## 山根徳太郎北京留学往復書簡研究プロジェクトの発足

田 中 ひとみ

## はじめに

大学史資料室では2022年2月、かつて本学教員であった山根徳太郎（1889～1973）の北京留学時の往復書簡群について研究プロジェクトを立ち上げ、この書簡群の公開に向け継続的に調査・研究を行うことを決定した<sup>(1)</sup>。これは2019年新出の書簡群に関してこれまで当室が蓄積してきた一連の成果をもとに、今後の調査・研究活動をプロジェクトとして正式に位置づけたものである。そこでこの機会に本稿では既刊の『大学史資料室ニュース』掲載記事<sup>(2)</sup>に基づき、改めてこれまでの経緯を記録しつつ、（1）このプロジェクトの発端にあたる本源的な命題とその時代背景を示し、（2）その探求から新出史料の発見と研究に至る過程を述べ、（3）書簡群の内容を概観し、プロジェクトの紹介に代えたい。

## 1. 本源的な問いとその時代背景—山根の難波宮研究開始前後

山根徳太郎は旧制大阪商科大学、のちに新制大阪市立大学にて長く教授として勤め、戦後は難波宮の発掘調査・研究および遺跡保存に大きな業績を挙げた人物である。

2018年7月、当室は栄原永遠男氏（大阪市立大学名誉教授・日本古代史）より戦中から戦後にかけての山根の足跡について問い合わせを受けた。栄原氏が山根の戦中・戦後の足跡を追求する理由は、山根の研究上の転換点を解明するためである。戦前の山根は京都帝国大学において西田直二郎（1886～1964）の文化史学の影響を強く受け、日本文化史・茶道史・陶磁に関する研究を蓄積しており、戦後に難波宮という都城研究に没入する姿と直線的にはつながりがたいと栄原氏は言う。栄原氏による「戦後の山根はなぜ難波宮の調査・研究に邁進するようになったのか」という命題は、その成果の意義や難波宮研究における山根の存在の大きさから、本学の学術研究史にとっても重要なテーマである。

ところで、山根は大阪商科大学（以下、商大）教授時代の1941（昭和16）～1942（同

---

(1) 令和3年度第2回大学史資料室運営委員会。2022（令和4）年2月

(2) 田中ひとみ「山根徳太郎と戦時下の大阪商科大学」（『大学史資料室ニュース』第23号、大阪市立大学大学史資料室、2019年2月）および同「山根徳太郎北京留学時代書簡の出現」（『大学史資料室ニュース』第26号、同、2022年3月）

17) 年、在外研究で北京へ1年間留学している。帰国後、彼は都城に関する論考を執筆するようになった。

- ・「帝都の营造に見る日本文化の一特質」(『経済学雑誌』第14巻3号、1944年3月)
- ・「帝都燕京について」(『人文』2-1、1948年2月)
- ・元『大都』の平面配置(『人文研究』1-2、1949年12月)

などが挙げられる。このうち「帝都の营造に見る日本文化の一特質」(1944年3月)の掲載誌『経済学雑誌』には当時の商大を反映したもうひとつの顔、『日本文化研究』という別名があった。この頃、戦時体制化していた商大は1940年に興亜経済研究室を設置、アジア太平洋戦争開始以降は学術研究体制の再編が強化され、1942年10月には興亜経済研究室以外の従来の共同研究室はすべて廃止、翌1943年は1月に南方経済研究室、4月に日本文化研究室を新設した<sup>(3)</sup>。商大が毎月発行していた『経済学雑誌』は、規程により年に一度、日本文化研究室の成果媒体として充てられることとなった<sup>(4)</sup>。日本文化研究室は主幹の恒藤恭以下6名の委員からなり<sup>(5)</sup>、山根も委員のひとりであった。上記の「帝都の营造」論文は山根が委員として『日本文化研究』第1輯(すなわち『経済学雑誌』第14巻第3号)に執筆したものであった<sup>(6)</sup>。そこでは中国と日本の都城比較がなされ、「所詮北京の都城はその昔長安城が一度もつた透徹性を保持してはゐないのである。予は北京の胡同裡に生活して身親しくその不便を満喫して、わが文化と支那文化の本質的差異を思考せずにはゐられなかつた」と記している。

山根が都城に関する上記3本の論考を認めた期間は、終戦をはさんだ日本社会の転換期であり、彼自身とその所属先である大学も変化を迎えていた。大阪商科大学は1949(昭和24)年4月、ほかの3つの前身校とともに新制大阪市立大学(以下、市大)となり、文系・理系を含めた総合大学が誕生した<sup>(7)</sup>。これに伴い市大法文学部教授となった<sup>(8)</sup>山根は同年1月に還暦を迎えており、3年後には定年退官を控える年齢になっていた。

前身校のひとつ、大阪市立都島工業専門学校は市大理工学部となり、その中では若手研究者らを中心に軍部の手を離れた大阪城址を対象とした共同研究が企画されていた。建築学科教授滝沢真弓の発案により法文学部の山根にも参加が呼び掛けられ<sup>(9)</sup>、このグループによる文部省科学研究費の申請は1950(昭和25)年、51年の不採択を経て、1952(同27)年に

(3) 『大阪市立大学百年史』全学編 第2章(1987年)

(4) 山根徳太郎「日本文化研究室彙報」(『日本文化研究』第1輯、1944年3月)

(5) 委員はその後、追加される(前掲「日本文化研究室彙報」)。

(6) 山根以外の執筆者は、本庄栄治郎学長、平実、恒藤恭、大坪一、黒羽兵治郎、細江逸記の6名。下線は日本文化研究室研究員。

(7) 但し、医学部は1955(昭和30)年に大阪市立大学医学部となった。

(8) 大阪商科大学予科教授も兼任

(9) 山根徳太郎「難波宮の発掘」(『難波宮址の研究』研究予察報告第五第二部、1965年)

採択がなつた<sup>(10)</sup>。こうして同年4月に大学内に発足した「大阪城址研究会<sup>(11)</sup>」は大阪城と難波宮址の研究を開始した。研究会は発掘調査の準備を進め、1954(昭和29)年2月に第1次発掘調査を行う。その後、この研究会は1954年度中に組織の改変<sup>(12)</sup>とともに名称も「難波宮址研究会」となり、以後難波宮の発掘調査・研究を継続していく<sup>(13)</sup>。初期の調査は難航したが、1961(昭和36)年の聖武朝大極殿発見を契機に史跡指定を受けるなど、のちに大きく実を結んだことはよく知られている。

以上のように在外研究帰国後の山根の研究活動をたどると、都城に関する論考の執筆と学内共同研究による難波宮の調査という流れが確認できる。これらは栄原氏の命題と深く関わるであろう事柄である。栄原氏による詳細な分析を参照されたい<sup>(14)</sup>。筆者はこの命題解明のために山根の北京留学やその後の共同研究の実態を明らかにすることが、戦時下における商大の学究体制や戦後新制総合大学初期の市大の姿を浮かび上がらせると考える。すなわちこの探求を通じ、当該期の大学の実像に迫ることが可能となるだろう。それでは山根の在外研究探索について、次で述べていこう。

## 2. 山根徳太郎北京留学往復書簡との出会い—出現から調査・研究へ—

山根の在外研究について、筆者はまず当室所蔵史料から探索を開始した。その成果については2019年2月、「山根徳太郎と戦時下の大阪商科大学」<sup>(15)</sup>に記した。山根の経歴のひとつとして1941年からの1年間の中国留学は知られていたが、これまでその詳細はほとんど明らかにされておらず出発・帰着の日時も確定されていない状態だった。商大時代の在外研究の公的記録は未だ確認できないが<sup>(16)</sup>、当室所蔵の商大同窓会会報より1941年5月15日神戸港より出発、翌42年5月1日の帰着や滞在先住所(北京東城丁香胡同、大日本海軍公館内)が判明した。このほか、中国大陸に複数の拠点をもつ商大同窓会が、北京・上海・青島など

(10) 伊藤純「幻の難波宮から実在の難波宮に—山根徳太郎の執念と情熱—」(『特別展 大阪遺産難波宮—遺跡を読み解くキーワード— 大阪歴史博物館図録、2014年)

(11) 昭和28年度文部省申請の「大阪城址研究会」構成員は、鴛淵一(代表者)、岩津潤、村松繁樹、渡辺久雄、望月信成、末永雅雄、角田文衛、山根徳太郎、平山敏治郎、直木孝次郎、大月明、滝沢真弓、後藤摂二、林野全孝、中沢誠一郎、藪内清の16名である(『大阪城の研究 研究予察報告第二』大阪市立大学大阪城址研究会、1954年8月)。

(12) 前掲『特別展 大阪遺産難波宮—遺跡を読み解くキーワード—』34頁。38頁掲載の1955(昭和30)年科学研究費交付金総合研究計画調査では山根が代表者と確認できる。

(13) 大阪城址研究会から難波宮址研究会への移行については詳細を解明できておらず、今後の課題である。

(14) 栄原永遠男「山根徳太郎の北京在外研究と新出の「山根書簡」—難波宮研究にいたる軌跡—」(『都市・周縁<史料と社会>科研 News Letter』第32号、2023年1月5日発行)

(15) 前掲、田中「山根徳太郎と戦時下の大阪商科大学」

(16) 未だ復命書等の発見に至っておらず、引き続き探索中である。

の支部で山根の歓迎会を催していることも把握できた。これらの記録から1年間のうちいくつかの時点の行動を押さえられはしたが、その他の大部分は依然として不明であった。

ところがその後、思いがけない急展開が起り、留学中の山根と家族が交わした書簡群が彗星のように眼前に出現した<sup>(17)</sup>。『大学史資料室ニュース』を目にした「わだつみのこえ記念館」(東京都文京区)から筆者の元へ、山根の北京留学時代関連史料の所在情報が寄せられたのである。曰く、山根のご子孫が今も史料を保管されているとのこと、所蔵者の了承を得て筆者をつないでくれた。2019年10月、早速訪問した所蔵者宅には山根とその家族が1年間に取交わした往復書簡、全272点が大切に保管されていた。まさしく奇跡のような出会いであった。ここに改めて「わだつみのこえ記念館」と資料所蔵者であるご子孫に御礼申し上げたい。

求めていた史料との出会いののち、大学史資料室では栄原永遠男氏および大阪市立大学(仮称)大学史資料館設立準備委員会<sup>(18)</sup>渡部陽子研究員の協力を得て、この北京留学書簡群の調査・研究を3名にて早速開始した。まず、2019年度~2020年度にかけて書簡全点のナンバリングとデジタルデータ化を完了した。この成果にもとづき2020年10月より研究会をスタートさせ、それ以来、現在も毎月継続中である。研究会では翻刻テキストデータの作成、確認、内容の検討、補注の作成などを行い、2022年9月時点ですでに第22回を数えている。このたび北京留学往復書簡プロジェクトの発足にあたって、改めて当室より栄原永遠男氏、渡辺健哉氏(本学文学研究科教授。東洋史)の両氏に協力依頼を要請し、2022年からは渡辺氏にも研究会の場を中心に種々助言を仰いでいる<sup>(19)</sup>。これまでに研究会でまとめた成果のひとつは、2020年11月開設の「大阪市立大学140周年記念展示室」に吊り下げパネルとして掲示した(後述)。

### 3. 北京留学往復書簡の概観

北京留学往復書簡は目下、調査・分析中であるが、現時点で把握できていることを以下に概観しておきたい。

この書簡群は、全272点からなる。山根から家族へ発信分が202点(封書121、はがき81)、家族から山根宛て発信は70点(封書63、はがき7)である(参照:山根徳太郎北京留学往復書簡 内訳表)。留学先に届いた家族発信分が山根の帰国とともに自宅へ持ち帰られ、一括されたものだろう。国を隔てての通信のため日数がかかり、書簡には互いの手紙の到着を確認する文言が散見される。また、内容の呼応もみられることから、これらの精査を

---

(17) 前掲、田中「山根徳太郎北京留学時代書簡の出現」参照

(18) 大阪市立大学(仮称)大学史資料館設立準備委員会は2022年3月、大阪公立大学への改組でいったん解散した。現在は新大学内に同一機能の組織を結成準備中である(2022年9月時点)。

(19) このほか、濱道孝尚本学文学研究科都市文化研究センター研究員(日本古代史)も加わり、現在、栄原永遠男氏、渡辺健哉氏、渡部陽子氏、濱道孝尚氏、田中ひとみの5名により研究会を続行中である。

山根徳太郎北京留学往復書簡 内訳表

		山根発信分		家族発信分	
		書簡	はがき	書簡	はがき
1941年	5月	6	10	3	0
	6月	14	3	7	0
	7月	10	7	6	0
	8月	8	8	6	0
	9月	7	15	5	0
	10月	11	0	6	0
	11月	18	0	7	2
	12月	10	4	7	0
1942年	1月	11	20	7	1
	2月	9	3	6	0
	3月	7	8	2	4
	4月	10	3	0	0
	不明	0	0	1	0
小計		121	81	63	7
合計		202		70	

進めれば双方向の書簡の関係が明らかになり互いの情報を補えるであろう。両者が一括して受け継がれた利点である。

内訳表にみる通り圧倒的に山根発信分が多く、留学中もその筆まめぶりは健在である。文字通り三日と空けず手紙を認めており、同日に2通送る日もある。また、留学期間の1941年5月から1942年4月まで1年を通じて継続的に往来がある。封書には、封筒の中に便箋が入っていない物や、また逆に便箋のみ残っており封筒がないものが5点あったが、ほとんどが封筒・便箋ともに揃った良好な保存状態であった。

山根一家は京都市内に居住しており、徳太郎、妻きよ（清子）、長女百合子、次女華子、長男明の5人家族であった<sup>(20)</sup>。往復書簡について、京都宅での書き手は妻の「きよ」が最も多く（46点）、6割以上を発信している。一方、山根発信分も「きよ」宛てが最多で（123点）、次いで家族一同宛て（48点）、子どもたち各々宛て（総数25点）、その他11点<sup>(21)</sup>である。数字としては夫婦間の往来が中心だが、「きよ」曰く、自分への手紙は家では公開状であること、皆が読む間にバラバラになってしまうので便箋には番号を振ってほしいと述べており、実際には家族全員でのやり取りだったといえるだろう。3人の子ども達には、出先からの絵

(20) このほかに、家事手伝いの「千枝子（ちいさん）」も同居していた。

(21) その他の宛て名は、「きよ・明」の2名宛て、「百合子・華子」の2名宛てなど、用向きに応じた宛て先となっている。

はがきを3人それぞれ宛てに同日・同所から投函する例が複数回あり、父親としての細やかな気遣いに心が温まる。殊に、受験生の長男・明には力のこもった長文の激励文を記しており、大きな期待をかけた存在だったと推察する。

北京と京都から互いの近況を報告しあうその内容は1年間の記録である。山根発信分は神戸港出発から北京への道程に始まり、北京で最初の寄宿先・海軍公館での暮らしぶり、中国語の勉強、北京での散策とその感想、現地での交流、中国の印象などが記されている。家族発信分は山根の留守を預かる「きよ」がそれぞれの生活の様子（仕事、就職活動、受験勉強など）を伝えており、双方がかなりの頻度で情報交換していた模様だ。

山根発信の書簡を概観して感じることのひとつに、中国への好印象が挙げられる。留学期間末期の書簡によると、

「この国の年中行事を考へてみるとほんとうにこの国が好きになります 私共のちいさい時の様々の風習がこゝでは依然大体に於てよく守られてゐるのですからねえ」（1942.3.1 徳太郎より山根清子宛て封書）

「北京の生活もあと三週間となりては何となくのこりおしく旧正月の行事を見かたがた又々市中を見廻り居申候 支那が全くすきになり毎年にても渡航してこの国この風物を研究致し度ものに覚え居申候」（1942.3.3 徳太郎より山根百合子宛てはがき）

などとあり、留学を終えようとする時期、中国への好意と名残惜しさ、再度来訪したいという思いを率直に表現している。

以上は全体的な概観である。続いて、これまでの調査で明らかになった事柄を2点記録しておく。以下の2点は、先述の通り「大阪市立大学140周年記念展示室」にパネル掲示中である。

1点目は留学中の拠点の変遷である。1年の滞在中に山根は5つの住まいで暮らした。最初の寄宿先は日本海軍公館内だった。当時、海軍少将として北京に赴任していた代谷清志（しろや・きよし）を頼ってのことだった。山根と代谷は北野中学校時代の同窓生である。その後、代谷は日本国内への異動により北京を離れ、それと同時に山根も転居を余儀なくされた。折しも北京は住宅難で、以下のように度々の変更となった。

- ① 1941.5.20～8.27 大日本海軍公館（北京東城丁香胡同3）
- ② 1941.8.28～9.5 櫻井公館（北京西城皮庫胡同乙57）※このあと、満州旅行
- ③ 1941.9.19～10.5 旅館 北京花壇（北京東城南河沿25）
- ④ 1941.10.6～10.14 興亜公館第18号（北京内三区倉南胡同）
- ⑤ 1941.10.15～1942.4.21 土方公館（北京東四、十条胡同第40号 興亜院宿舍22号）

2点目は、3度の中国国内旅行の足跡である。山根発信分のはがきには、絵はがきが多く使われており、視覚的にも楽しませてくれる。留学期間に3度、旅に出ており、その際に現地になんだ絵はがきを発信している。これについてはパネルを参照されたい（パネル：山根徳太郎の足跡 北京留学中の中国国内旅行）。1回目は1941年9月に山西省・満州へ（宣

パネル：山根徳太郎の足跡 北京留学中の中国国内旅行

1941(昭和16)年から1942(同17)年にかけて、北京留学中だった商大予科教授・山根徳太郎は、この間に3度の中国国内旅行に出掛けている。パネル「山根徳太郎の足跡(1)」でも紹介した書簡群より、日中戦争下の旅を紹介しよう。画像はすべて山根が発送した絵はがきである。

[1]1941年9月6日-9月17日

山西省方面・満州旅行 ー宣化(張家口)・大同(雲崗)・新京(長春)・ハルビンー

この旅行では、前半は山西省方面へ、後半は満州へと、2方向に足を運んでいる。前半では万里の長城や大同にて雲崗の石仏を見学。子ども時代から耳にしていた万里の長城に感慨を覚え、雲崗の石窟では言葉を失うほどであった。満州の印象は「誠に善きもの」だったと率直な感想を手紙に認めている。

9/6 蒙疆宣化(張家口)万里の長城 →9/9 大同 雲崗の石仏見学 →9/10 山西の旅を済ませ、列車にて満州へ向かう  
→9/12 新京(長春)到着 →9/14 ハルビン(哈爾濱)到着 →9/15 新京駅到着 →9/17 北京帰着



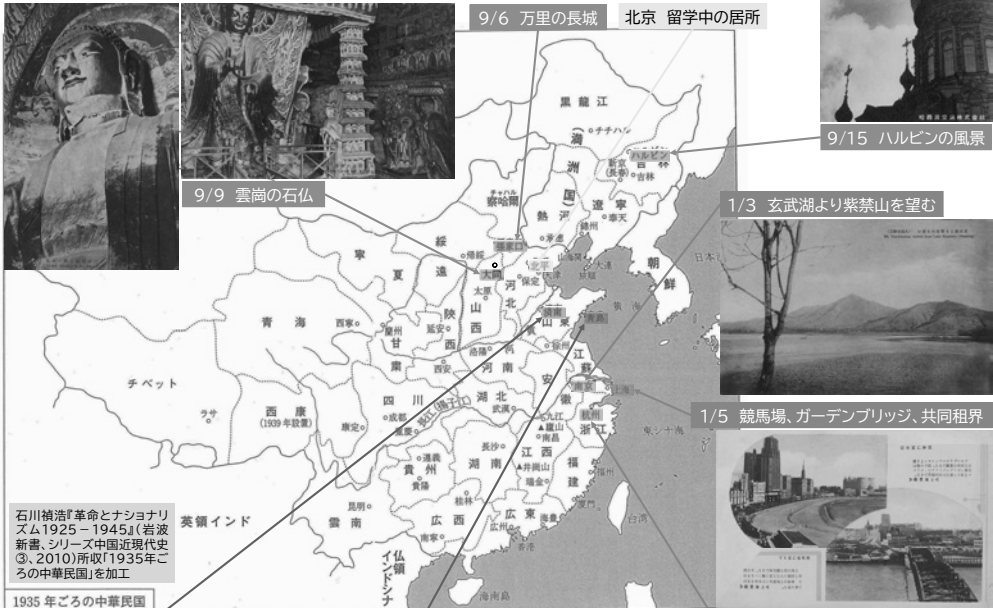
9/9 雲崗の石仏



9/6 万里の長城 北京 留学中の居所



9/15 ハルビンの風景



1/3 玄武湖より紫禁山を望む



1/5 競馬場、ガーデンブリッジ、共同租界

石川鎮浩『革命とナショナリズム1925-1945』(岩波新書、シリーズ中国近現代史③、2010)所収「1935年ごろの中華民国」を加工  
1935年ごろの中華民国

4/4 済南 大公望釣魚の遺跡



3/29 青島居留民団および山東路



1/17 杭州西湖 (日付はハガキの発信日)



[3]1942年3月25日-4月4日

青島、済南旅行

青島について「町の美しいことは東洋でも有数」と絶賛。青島での数日間は多忙だったが、心豊かに過ごしたと感想を述べる。済南からは「水の少ない北支の中でも、済南だけは地下水が湧き出ている」と大公望釣魚遺跡の絵はがきを発送している。

3/25 北京発-天津着 天津日本租界 日本海軍武官府に宿泊  
→3/26 天津発。済南着、済南発 →3/27-4/1 青島滞在  
→4/2 青島発。済南到着 →4/2-4/4 済南滞在  
→4/4 晩、北京帰着

[2]1941年12月30日-1942年1月20日

江南旅行(中支旅行) ー上海、南京、杭州、蘇州ー

年末年始を南京の日本海軍公館にて過ごす。旧知の海軍軍人・代谷清志が前年10月より南京に着任しており、南京を拠点とした旅行だった。上海では近代都市に驚き、杭州では西湖の眺望を心静かに楽しんでいる。上海滞在中には大阪商大同窓会上海支部にて山根の歓迎会が開かれた。

12/30 北京発-天津着-天津発 →12/31 南京の日本海軍公館到着  
→1/1-1/4 南京滞在 →1/4 午後、南京発。夜、上海到着  
→1/4-1/10 上海滞在(1/7大阪商大同窓会上海支部にて山根歓迎会)  
→1/11-1/14 杭州に2日間・蘇州に2日間滞在 →1/15-18 ふたたび南京に戻り滞在  
→1/19 南京発。北京へ向かう →1/20 北京到着



化〈張家口〉、大同〈雲崗〉、新京〈長春〉、ハルビン)、2回目は同年12月末から1942年1月に江南方面へ(上海、南京、杭州、蘇州)、3回目は1942年3月から4月にかけて青島、済南方面である。書簡内訳表のうち1941年9月、1942年1月のはがき点数が多いのはこのためである。旅先での感想を率直に述べており、宣化(張家口)では子ども時代から耳にしていた万里の長城を目にして感慨無量と述べ、大同(雲崗)では大石仏に言葉を失ったとある。青島については「町の美しいことは東洋でも有数」と褒めたたえ、杭州では西湖の眺望を心静かに楽しんでいる。

## おわりに

以上のように本稿ではプロジェクトの発足に際し、これまでの当室での取り組みを振り返り、新出史料のアウトラインについて述べてきた。山根徳太郎と難波宮という大テーマは、学術研究史として、また大学史として解き明かすに値する命題である。山根は北京で何を学び、どのような交流を持ち、どのように感じ、思索したのか。そして留学で得た体験がのちの彼にとってどのような意味を持つのか。書簡群を調査し、留学の実態を明らかにすることを通じて検討していきたい<sup>(22)</sup>。プロジェクトでは今後も研究会を継続し、書簡群の公開にむけ、引き続き取り組んでいく。

(たなか ひとみ・大阪公立大学大学史資料室・大阪市立大学恒藤記念室研究員)

---

(22) なお、この書簡群についてはプロジェクトメンバーによる以下の文献も参照されたい。渡辺健哉「研究会彙報 大阪公立大学国際シンポジウム2021 フォローアップ・セミナー(第2回) 山根徳太郎と北京―米原永遠男報告のコメントに寄せて」(『都市・周縁<史料と社会>科研 News Letter』第30号、2022年11月5日発行)